

里親の養育負担感に関する一考察 — 里母の身体的・精神的負担感の分析を通して —

金城 悟*・中山 哲志**
(平成 29 年 12 月 9 日査読受理日)

A study of the burden that foster parents feel for child care — From the analysis of physical and mental burdens of foster mothers —

KINJO, Satoshi NAKAYAMA, Satoshi
(Accepted for publication 9 December 2017)

要約

里親の抱える養育負担は里親養育の困難さの一要因になっていると推察される。本研究は里親のうち、子どもに日常的に接する時間の多い里母の身体的負担感、精神的負担感を分析し、里親の抱える養育負担感の構造を明らかにすることを目的としたものである。

本研究の結果、幼児期の里子を持つ里母は身体的負担感が有意に高く、里母の年齢が増すに連れて里母の身体的負担感は増大することが判明した。里子に発達障害がある場合は、里母の身体的負担感が高い値を示した。また、コミュニケーションに困難さを抱えている里子や育てることが難しいと感じる里子に対しては里母の身体的負担感が高くなる傾向にあることがわかった。

里母の精神的負担感に関しては、里子の年齢が高くなるほど里母の負担感が増大し、里子に発達障害や情緒不安の症状がある場合も里母の精神的負担感が増大することがわかった。

Abstract

It is surmised that the burden of child care that foster parents carry is a primary cause behind the difficulties of child care faced by foster parents. This study analyzed the physical and mental burdens that foster mothers often come into contact with during their daily interactions with children, and aimed to understand the structure of the child care burden carried by foster parents.

Study results determined that foster mothers with an infant foster child undergo significantly high physical fatigue which only increases as the foster mother ages. If a foster child has a developmental disorder, the physical fatigue of foster mothers demonstrated a high value. It was also found that the physical fatigue of foster mothers tends to increase when dealing with a foster child that either has difficulty communicating or is felt to be difficult to raise.

In regards to the mental burden of foster mothers, it was found that as a foster child gets older, a foster mother's sense of burden increases, and the mental burden on a foster mother also increases if the foster child has a developmental disorder or symptoms of being emotionally disturbed.

キーワード：里親、養育負担感、身体的・精神的負担感

Key words : foster parents, burden of nurturing, physical and mental burden

I. はじめに

里親制度は、児童福祉法に基づき、児童相談所が要保護児童の養育を委託する制度である。2002年に親族里親、

専門里親が創設され、2008年の児童福祉法改正で、「養育里親」と「養子縁組を希望する里親」とを制度上区分した。

2009年に養育里親と専門里親の研修が義務化され、2017年から里親の新規開拓から委託児童の自立支援までの一貫した里親支援を都道府県の児童相談所の業務として位置付けるとともに、養子縁組里親を法定化し、研修が義

* 保育科 社会福祉研究室

** 東京成徳大学福祉心理学科

務化された（厚生労働省子ども家庭局家庭福祉課，2017）。現在，3,043世帯の養育里親に3,824人の子どもが，176世帯の専門里親に215人の子どもが委託されている。

社会的養護において国は施設養護よりも里親委託を優先して検討すべきであるとの原則を打ち出している。しかし，欧米と比較して里親委託率は低く，里親への支援体制の不備や里親不足が課題となっている。里親不足の一方で，虐待を受けて育った里子の増加や里親の高齢化など里親の養育負担に影響する要因は増大している。

里親の養育負担感が高いことは先行研究（江崎，2009；奈良ら，2011；宮里ら，2012；深谷ら，2013；深谷ら，2016；引土ら，2017など）で指摘されているが，里子自身もさまざまな困難を抱えている。里子にとって里親に養育されるということはどのような体験なのだろう。岩崎（2016）は児童養護施設で暮らした経験を持つひとへの面接調査を通して「家族との突然の別離を、施設に入所する多くの子どもたちが経験している。当の子どもにとっては、納得のいかない日常生活からの離脱であり「過去」との切断である。」と指摘している。このことは里親という「他者」の家庭で暮らすことになる里子にも当てはまることであろう。虐待によってトラウマを抱えた子どもや発達障害をもつ里子は増加している。養育困難な里子の増加という要因もあり、里親の養育負担感が高い。

里親の抱える養育負担感は里親養育を行う上での困難さの一要因になっていると推察される。里親の養育負担感はどのような要因で構成されているのだろうか。これまで里親の養育負担感に関する研究では里親に対する面接調査が必要であったことから質的研究によるアプローチが多くとられ（例えば，宮里ら，2012；河野ら，2014；伊藤，2015など），里親の内面世界の構造を明らかにする試みがなされた。一方，里親の養育負担感を心理学的尺度に基づいて分析した研究（例えば，奈良ら，2011など）による知見はまだ蓄積されているとはいえない。筆者は里親研究に関わる中で一定のデータ数が必要な量的研究が成立するアンケート調査の実施は難しいことを実感している。今回，里親会及び里親の皆様のご協力を得て里親アンケートを実施することができた。

本研究では里親アンケート調査の中から，里親の養育負担感を明らかにするため里親の抱える身体的・精神的負担感を指標としてその実態を分析し，里親の養育負担感について論考していく。

II. 方法

1. 調査対象

全国里親会並びに全国各地の里親会のご協力により全国66か所でアンケート調査を実施した。里親宛に3,450通を郵送し，1,862人から回答が得られた（回収率53.9%）。里

親1,862人のうち里母が記入した1,267人の調査票を選出し，さらに無回答や回答ミスを除く1,191人を分析の対象とした。

2. 調査方法

(1) 里母の身体的負担感

身体的負担感を測定する項目として，①首筋や肩がこる，②腰が痛い，③よく眠れない，④体の節々が痛い，⑤頭が重いまたはよく頭痛がする，の5項目を用いた（表1）。分析にあたっては5項目を合算した値の平均値と標準偏差を使用した。5項目を合算した値の平均値は15.5，標準偏差は3.4であった。平均値-1標準偏差から平均値+1標準偏差までの範囲の値を「普通群」，普通群の最大値より大きい値を「低負担群」，普通群の最小値より小さい値を「高負担群」と概念的に定義した。

表1 身体的負担感測定項目

(1) 首筋や肩がこる
(2) 腰が痛い
(3) よく眠れない
(4) 体の節々が痛い
(5) 頭が重い，またはよく頭痛がする

(2) 里親の精神的負担感

養育負担感には身体的負担感と精神的負担感があることが知られている。そこで，里親アンケート調査の質問項目の中から表2に示す5項目を里母の精神的負担感を測定する項目とした。5項目はいずれも里親の里子に対する養育感情を測定する項目である。里子に対する養育感情がポジティブな場合は里子養育に関する精神的負担感が低く，ネガティブな場合は里子養育に関する精神的負担感が高いと定義した。

表2 精神的負担感測定項目

(1) Aちゃんは，わりと育てやすい子に入ると思う
(2) いくつか欠点はあるけれど私（里母）はAちゃんが好きだ
(3) 私（里母）は，Aちゃんの世話があまり苦にならない
(4) Aちゃんと私（里母）は，けっこう気持ちが通い合っている
(5) Aちゃんを育てることは，私（里母）の張り合いの一つになっている

3. 倫理的配慮

調査票には調査の目的と概要，調査データの使用に関する説明文が記載され，調査の主旨に同意した里親が調査に協力した。調査票への回答は無記名であり，個人が特定されないよう配慮した。調査票は回答者により返送専用の封筒に同封され調査者へ郵送された。

Ⅲ. 結果と考察

1. 被調査者のプロフィール

里母の年齢は40歳代以下が33.0%、50歳代が38.0%、60歳以上が29.0%であった。里母の約7割は50歳代以上であった。里母の職業は専業主婦が46.1%、有職者が41.0%であった。自分の子どもを育てたことがある里母の割合は56.7%、育てたことがないと回答した割合は43.3%であった。

(1) 里子の年齢と里母の身体的負担感の関係

里子の年齢と里母の身体的負担感の関係を図1に示す。図1を見ると、幼児期の里子を抱えている里母が身体的負担を最も多く感じていることがわかる。乳児期は身体的負担が最も少なく、小学校低学年以上は高負担群の割合に差はなかった。里子の年齢と里母の身体的負担の関係を χ^2 検定により分析した結果、有意な関連性は認められなかった。

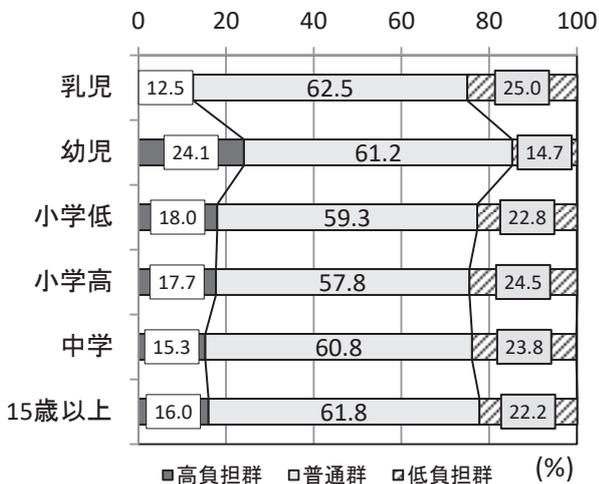


図1 里子の年齢×里母の身体的負担感

全体的な差異はなかったものの、調整済み残差による残差分析の結果、幼児期の里子を持つ里母は身体的負担が有意に高いことが判明した ($p < .05$)。乳幼児期は愛着形成が求められる時期であり、里母も抱き上げ行動などのスキンシップや情緒の結びつきを積極的に働きかけることが求められる。乳幼児期は子どもの身体的な発達も急激に変化する時期である。3kg前後で生まれた新生児は1歳を過ぎると9kgを超えるようになる。幼児期に入ると脳の重さも出生時の約2倍になり、随意運動も活発になってくる。6歳児になると体重は20kg前後に成長する。里母の高齢化もあり、抱き上げ行動ひとつをとっても幼児期は乳児期より里母への身体的負担が大きいと考えられる。

(2) 里母の年齢と里母の身体的負担感の関係

全国里親委託等推進委員会の調査(2016)によると、里母の年齢構成は40歳代から60歳代までで9割近くを占めていることが報告されている。そのうち、50歳代以上は

全体の約6割となっている。本調査においても50歳代以上は約6割を占めており、里母の年齢層は高いことがわかる。里母の年齢層が高いことは身体的負担とどのような関連性があるのだろうか。里母の年齢と身体的負担の関係を図2に示した。

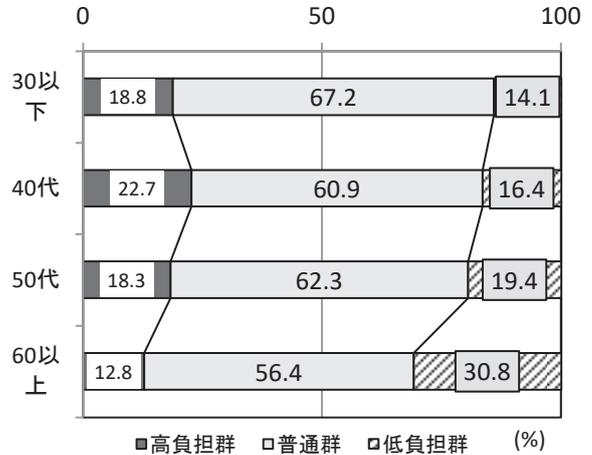


図2 里母の年齢×里母の身体的負担感

里母の年齢と身体的負担には有意な関連性が認められた ($\chi^2 = 30.0$, $df = 6$, $p < .01$)。高負担群は40代が最も多く(22.7%)、つぎに30代以下(18.8%)であった。高負担群が最も少ない年齢層は60代以上(12.8%)であった。低負担群を見ると30代以下が最も少なく(14.1%)、年代が増すにつれて多くなることがわかった。残差分析の結果、60代は身体的負担がすべての年齢層で最も少なく(12.8%)、低負担群(30.8%)は最も多いことが判明した。里母の年齢層が高くなればなるほど低負担群の割合が高いという結果は、一見、ベテラン里親になるほど身体的負担は少なくなるように見える。しかし、里母の年齢×里子の年齢のクロス集計を行うと、30代以下と40代の里母は幼児を養育する割合が最も高く、50代と60代は15歳以上の里子を養育する割合が高くなっている。図1の結果に示されているように里母の身体的負担は幼児を養育する場合は15歳以上の里子を養育するよりも高い。この結果から里母の身体的負担感には里母の年齢による影響よりも、養育対象の里子の年齢によって影響されると考えられる。

(3) 実子数と里母の身体的負担感の関係

実子の数と里母の身体的負担感に有意な関連性は認められなかった。残差分析の結果でもいずれの組み合わせにおいても有意な値は認められなかった。本調査の質問は「現在、同居している実子がいるか」を問うものであった。里子と同じ空間で暮らしている実子の有無は里母の身体的負担感とは無関係であることがいえる。

(4) 里子の行動の偏りと里母の身体的負担感の関係

里子の行動の偏りを7項目(落ちつきがない、じっとす

るのが苦手、気が散りやすい、一方的にしゃべる、行動がマイペース、情緒が不安定、不注意なミスをする)に分類した。

行動の偏りと里母の身体的負担には有意な関連性は認められなかった。残差分析の結果においても有意な差異は認められなかった。里母の約2割は里子の行動の偏りに対して身体的負担感があることを自覚していることが示された。

(5) 育てやすさと里母の身体的負担感の関係

里子の育てやすさと里母の身体的負担感(図3)に有意な関連性が認められた($\chi^2=14.1$, $df=6$, $p<.05$)。残差分析の結果、里子に対し育てるのが「ひどく難しい」と里母が感じる場合、高負担群(22.7%)が有意に多くなることがわかった。これとは逆に「とても育てやすい」と感じる場合、里母の低負担群(31.6%)は有意に多くなることがわかった。里子が育てやすいと感じるほど里母の身体的負担感は小さく、里子が育てにくいと感じる里母ほど身体的負担感が高いといえる。

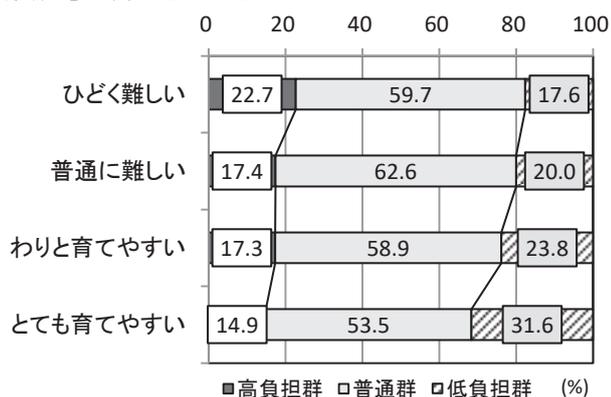


図3 育てやすさ×里母の身体的負担感

(6) 里子の発達障害の有無と里母の身体的負担感の関係

里子の発達障害の有無と里母の身体的負担感(図4)に有意な関連性が認められた($\chi^2=10.5$, $df=2$, $p<.01$)。残差分析の結果、里子に発達障害がある場合の里母の高負担群(21.5%)と里子に発達障害がない里母の低負担群(25.7%)

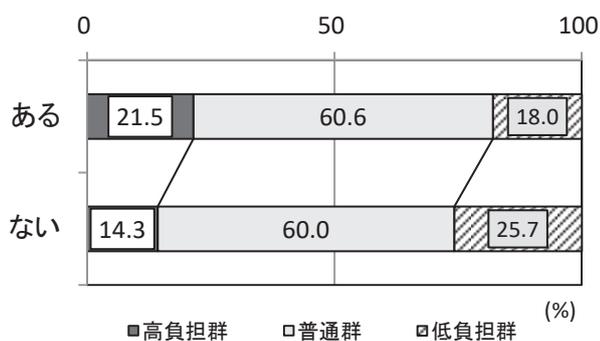


図4 発達障害の有無×里母の身体的負担感

(25.7%)は有意に多いことがわかった。里子の発達障害の有無は里母の身体的負担感に影響を及ぼすと考えられる。

(7) 里子の人間関係と里母の身体的負担感の関係

里子の人間関係と里母の身体的負担感(図5)に有意な関連性が認められた($\chi^2=24.2$, $df=6$, $p<.01$)。残差分析の結果、里子は人間関係がとても不器用だと思う里母は他の選択肢と比較して有意に高負担群(27.5%)が多く、人間関係が不器用とは思わないと回答した里母は低負担群(27.7%)が有意に多いことがわかった。

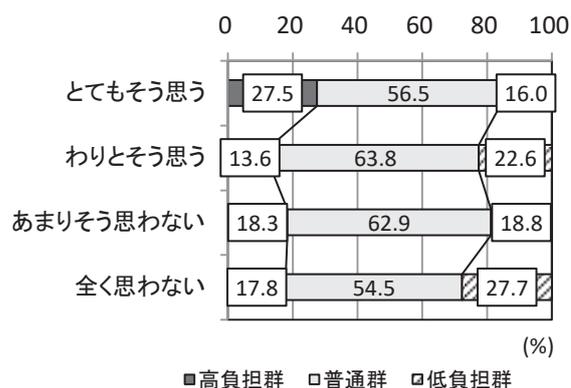


図5 里子の人間関係×里母の身体的負担感

3. 里母の精神的負担感

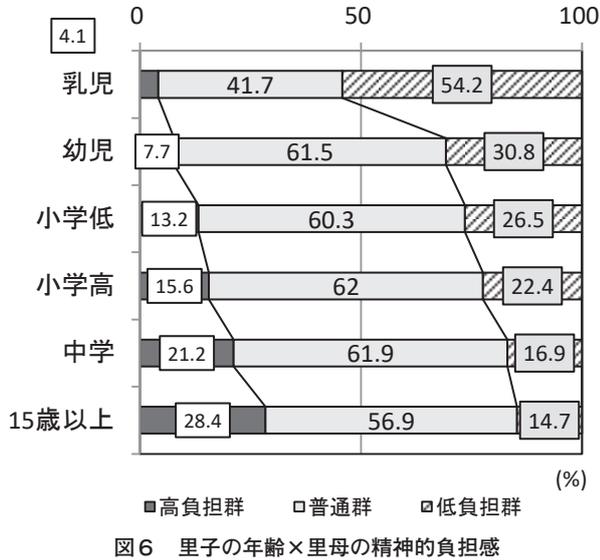
里母の精神的負担感の指標として選択した5項目の選択肢の値を反転し合算した値の平均値は15.6、標準偏差は3.3であった。平均値-1標準偏差から平均値+1標準偏差までの範囲の値を「普通群」、普通群の最大値より大きい値を「低負担群」、普通群の最小値より小さい値を「高負担群」とした。

(1) 里子の年齢と里母の精神的負担感の関係

里母の身体的負担感とは異なり、里子の年齢と精神的負担感にはどのような違いがあるのだろうか。里子の年齢と里母の精神的負担感の関係を χ^2 検定により分析した結果、有意な関連性が認められた($\chi^2=76.6$, $df=10$, $p<.01$)。図6を見ると、里子の年齢が高くなるほど里母の高負担群は増大していることが示されている。逆に言えば、里子の年齢が低いほど里子への精神的負担感が少ない。乳児期には里母の約5割が低負担群となっており、高負担群は4%とわずかである。高負担群は15歳以上になると乳児期の約7倍に増大していることがわかる。

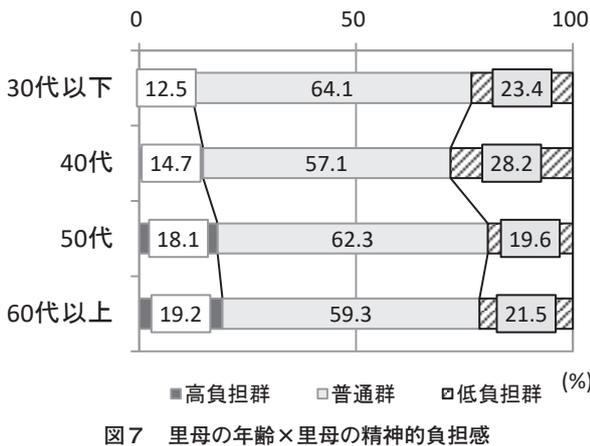
本研究の里母の約7割は養育困難な里子の養育に携わっている。乳幼児期は里母が安全基地となるため母子間の関わりが密接であるが、学齢期に入ると家庭以外の環境で過ごす時間が多くなり、授業やクラスメートとの人間関係な

ど乳幼児期にはなかった養育困難が出現すると考えられる。また、里子の年齢が増すにつれて乳幼児期には見られなかった問題行動が出現する割合も高まると推察される。これらのことから、里子の年齢が増加するにつれて子育てが難しくなり、そのことが里子に対するネガティブな感情を引き起こし精神的負担感の増大につながると考えられる。



(2) 里母の年齢と里母の精神的負担感の関係

里母の年齢と精神的負担感の χ^2 検定の結果、全体的に有意な関連性は認められなかった。しかし、里母の年齢層が高くなるにつれて高負担群の割合が増加する傾向にあることがわかった(図7)。残差分析の結果、40代は各年齢層と比較して低負担群(28.2%)の割合が最も高かった。



(3) 実子数の関係と里母の精神的負担感の関係

実子の数と里母の精神的負担感に有意な関連性は認められなかった。実子の同居の有無は里母の精神的負担感に影響を及ぼさないことがわかる。

(4) 里子の行動の偏りと里母の精神的負担感の関係

里子の行動の偏りと里母の精神的負担感(図8)に有意な関連性が認められた($\chi^2=42.1$, $df=12$, $p<.01$)。残差分析の結果、「情緒が不安定」な子どもは他の行動パターンと比較して高負担群(35.7%)が有意に多いことがわかった。情緒が不安定とは、イライラしたり、ふさぎ込んだり、突然怒ったり、暴力的な行為をしたりするような感情の起伏が激しい状態のことである。里母にとってはささいなことで感情が変化する里子に対しては養育が難しいと感じることが示されている。

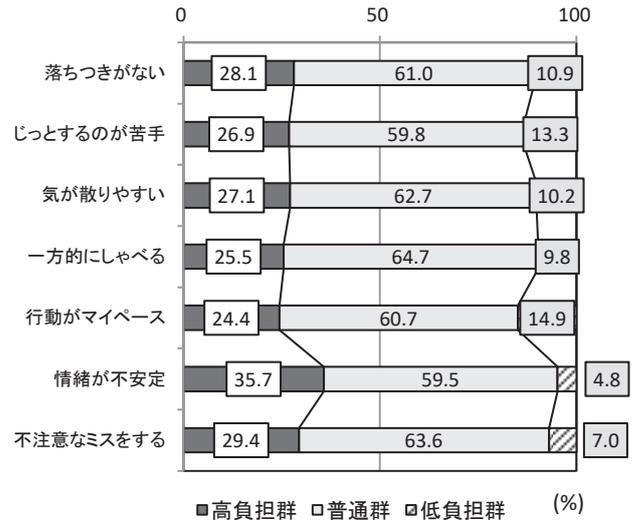


図8 里子の行動の偏り×里母の精神的負担感

(5) 育てやすさと里母の精神的負担感の関係

里子の育てやすさと里母の精神的負担感(図9)に有意な関連性が認められた($\chi^2=468.6$, $df=6$, $p<.01$)。残差分析の結果、「ひどく難しい」は高負担群(40.3%)が有意に多く、「とても育てやすい」の低負担群(78.9%)は有意に多いことがわかった。図9を見ると里子が育てやすいと感じる里母ほど里子に対する精神的負担感の低い割合が多く、育てにくいと感じる里母ほど里子に対する精神的

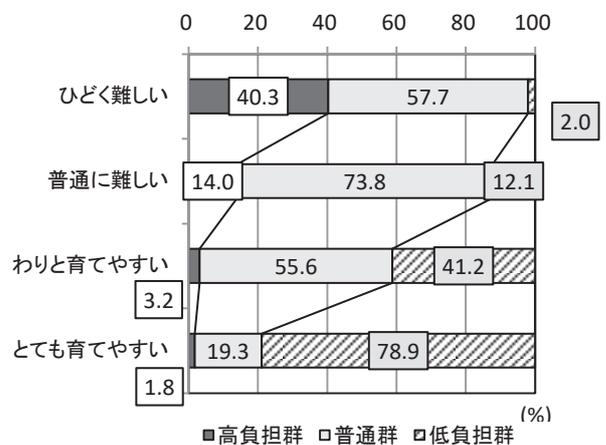


図9 育てやすさ×里母の精神的負担感

負担感が高いことがわかる。「とても育てやすい」と回答した里母の約8割は低負担群に属しており、「ひどく難しい」と回答した里母の約39倍も低負担群は多い。里子の育てやすさと里子に対する精神的負担感は明らかに関連しているといえる。

(6) 里子の発達障害の有無と里母の精神的負担感の関係

里子の発達障害の有無と里母の精神的負担感(図10)に有意な関連性が認められた($\chi^2=24.2$, $df=6$, $p<.01$)。残差分析の結果, 里子に発達障害がある場合の里母の高負担群(24.7%)と里子に発達障害がない里母の低負担群(22.3%)は有意に多いことがわかった。

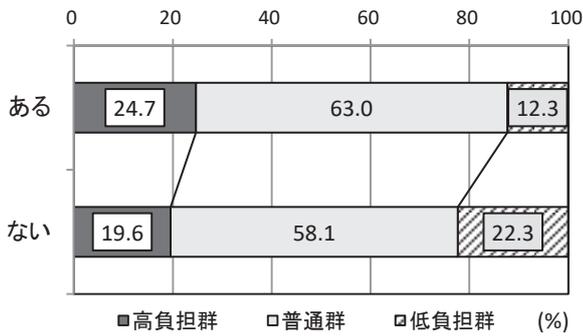


図10 発達障害の有無×里母の精神的負担感

(7) 里子の人間関係と里母の精神的負担感の関係

里子の人間関係と里母の精神的負担感(図11)に有意な関連性が認められた($\chi^2=322.4$, $df=6$, $p<.01$)。残差分析の結果, 里子は人間関係がとても不器用だと思う里母は他の選択肢と比較して有意に高負担群(47.0%)が多く, 人間関係が不器用とは思わないと回答した里母は低負担群(50.8%)が有意に多いことがわかった。里子は人間関係が不器用だと思うほど里母の精神的負担感は高くなり, 人間関係が不器用だとは思わないほど里母の精神的負担感は低くなることが示されている。里子の人間関係の不器用さ

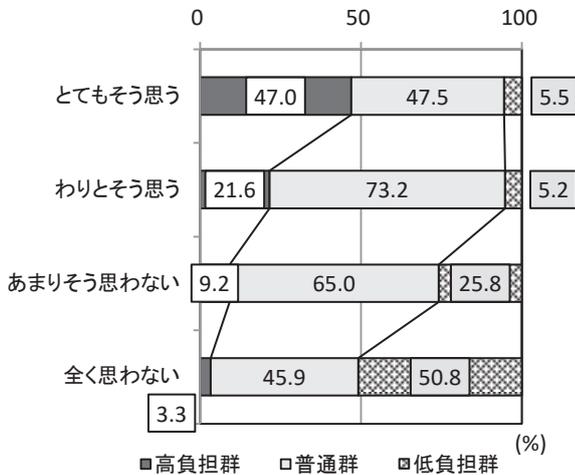


図11 里子の人間関係×里母の精神的負担感

は里母の精神的負担感にネガティブな影響を及ぼしていることが判明した。

IV. まとめと今後の課題

里母の身体的負担感と精神的負担感に関する分析からつぎのことが明らかになった。

(1) 里母の身体的負担感の特徴

- ① 幼児期の里子を持つ里母は他の年齢層より身体的負担感が高い
- ② 40代の里母は他の年齢層より身体的負担感が高い
- ③ 実子の有無は里母の身体的負担感に影響しない
- ④ 里子の行動の偏り(落ち着きがないなど)は里母の身体的負担感に影響しない
- ⑤ 里子を育てやすいと感じるほど身体的負担感は低い
- ⑥ 発達障害のある里子を養育する里母は身体的負担感が高い
- ⑦ 人間関係に難しさを抱えている里子を養育する里母は身体的負担感が高い

(2) 里母の精神的負担感の特徴

- ① 里子の年齢が高くなるほど里母の精神的負担感が高い
- ② 40代の里母は他の年齢層より精神的負担感が低い
- ③ 実子の有無は里母の精神的負担感に影響しない
- ④ 里子の行動の偏り(落ち着きがないなど)は里母の精神的負担感に影響する
- ⑤ 里子を育てやすいと感じるほど精神的負担感は低い
- ⑥ 発達障害のある里子を養育する里母は精神的負担感が高い
- ⑦ 人間関係に難しさを抱えている里子を養育する里母は精神負担感が高い

今回の里親アンケート調査を通して里親(里母)の抱える身体的・精神的負担感の特徴が明らかになった。さらに, 里親の身体的・精神的負担感には里子の養育負担感につながる事が判明した。

分析結果の中で特に発達障害をもつ里子の養育負担感について注目したい。里子に発達障害がある場合の里母の身体的負担感と精神的負担感にはほぼ同じパターンを示しており, 里子の発達障害の有無は, 里母の身体的負担感と精神的負担感の両方に影響を及ぼすことが判明した。障害のある子どもを育てる母親の育児負担感には健常児を育てる母親より強いことが先行研究で多数報告されている。特に発達障害のある子どもを育てる母親の育児ストレスは高いことが指摘されている(岡野, 2012; 道原, 2012; 中田, 2014; 井上, 2016など)。里母の身体的負担感と精神的負担感の分析では先行研究の指摘通り, 発達障害のある里子を育てる里母の養育負担感には発達障害のない里子を育てる

里母より負荷が高いことが示された。しかし、一方で里母の約8割は里子が発達障害を有していても子育ての負担感には有していないという結果が得られた。このことは里母の子育て力（養育力）の高さを示すものと考えられる。里母の養育負担感と実子が発達障害をもつ母親の育児負担感を比較するデータは先行研究でも得られていないが、今後、検討する必要がある。

現在、発達障害をもつ子どもの親への養育支援として国の支援を受けて開発されたペアレント・プログラムが全国的に展開されつつある（特定非営利活動法人アスペ・エルデの会、2015；国立リハビリテーションセンター、2016）。ペアレント・プログラムは発達障害をもつ里子を養育する里母にとっても有効であることが明らかにされている（宮地、2017）。本研究の結果で示された里親の養育負担感（身体的負担感、精神的負担感）がレスパイトケアやペアレント・プログラムのような効果が検証された支援を行うことにより軽減するのかを今後明らかにすることが課題となる。

※本研究はつぎの科研費の補助金を受けたものである。
 文部科学省科学研究費補助金(26380772)、基盤研究(C)、
 研究課題：発達障害児を抱える里親の養育困難に関する実証的研究、研究代表者：中山哲志、研究分担者：深谷昌志・深谷和子・倉本英彦・沢崎達夫・金城 悟・石田祥代・関谷大輝、研究期間：2014-2017。

引用文献

江崎伸介（2009）：里親の養育観に関する一考察—里母の心理的葛藤とソーシャルサポート形成の視点から。臨床心理学研究, 7, 53-71.

深谷昌志・深谷和子・青葉紘宇編著（2013）：社会的養護における里親問題への実証的研究—養育里親全国アンケート調査をもとに。福村出版。

深谷昌志・深谷和子・青葉紘宇（2016）：虐待を受けた子どもが住む「心の世界」—養育の難しい里子を抱える里親たち。福村出版。

早川 洋（2014）：発達障害と医療連携。世界の児童と母性, 77, 43-48.

引土達雄・水木理恵・前川暁子・柳楽明子・辻井弘美・若松亜希子・奥山真紀子（2017）：医療機関による支援に関する里親へのニーズ調査。小児の精神と神経, 56 (4), 361-374.

井上和博・柳田信彦・窪田正大・深野佳和・赤崎安昭（2016）：発達障害児を持つ母親の育児ストレス—児童発達支援事業所における調査の解析。鹿児島大学医学部保健学科紀要, 26 (1), 13-20.

伊藤嘉余子（2015）：里親の成熟プロセスに影響を及ぼす里親支援。子ども家庭福祉学, 14, 13-23.

岩崎美智子（2016）：施設で暮らすということ—子どもの生活をゴフマンの『アサイラム』で読み解く試み—。東京家政大学博物館紀要, 21, 1-13.

木ノ内博道（2010）：里親による里親の支援—里親会の実情と課題。世界の児童と母性, 69, 55-58.

国立リハビリテーションセンター（2016）：ペアレント・プログラム事業化マニュアル, 1-23.

河野秀之・溝口 剛（2014）：里親と乳幼児里子との愛着形成に関する研究：里親の困りとその支援に焦点をあてて。教育実践総合センター紀要, 32, 17-31.

厚生労働省子ども家庭局家庭福祉課（2017a）：社会的養育の推進に向けて。厚生労働省, 1-110.

道原里奈・岩元澄子（2012）：発達障害児をもつ母親の抑うつに関連する要因の研究—子どもと母親の属性とソーシャルサポートに着目して。久留米大学心理学研究, 11, 74-84.

宮地菜穂子（2017）：社会的養護が必要な子どもにとって、虐待予防の視点も含めた家族支援の意義：里親支援も視野に。チャイルドヘルス, 20 (6), 413-417.

宮里慶子・森本美絵（2012）：養子縁組里親、養親の抱える困難とその対処—里親支援枠組みからの離脱とステイグマ。千里金蘭大学紀要, 9, 1-12.

中田洋二郎・筒井恵里子（2014）：現在の発達障害における母親の精神的ストレスについて—定性的データ分析の試みを通して。立正大学臨床心理学研究, 12, 1-12.

岡野維新・武井祐子・寺崎正治（2012）：広汎性発達障害児をもつ母親の育児ストレスと父親の母親に対するサポート。川崎医療福祉学会誌, 21 (2), 218-224.

大村美喜・大石英史（2012）：里親が抱える困難とその克

服によるあり方の変容. 山口大学大学院教育学研究科附属
臨床心理センター紀要, 3, 65-78.

特定非営利活動法人アスペ・エルデの会 (2015) : 厚生労働省平成 26 年度障害者総合福祉推進事業報告書「市町村で実施するペアレントトレーニング」に関する調査について一. 1-88.

全国児相談所長会 (2011) : 児童相談所における里親委託及び遺棄児童に関する調査報告書, 1-123.

全国里親委託等推進委員会 (2016) : 平成 27 年度調査報告書. 1-134.